

希望に満ちた異界の風景 「井手菜穂 — 整うまでの、—」展に寄せて

水滴が拭われて、街路樹のプラタナスの若葉が次々に現れては去り現れては去りした。

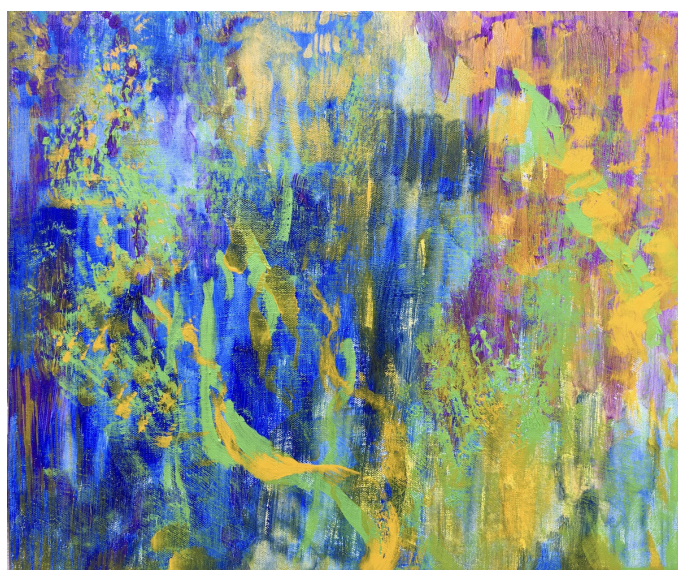
梨木香歩『西の魔女が死んだ』

井手菜穂が描き続けている風景画には、後半期のゴッホやモネの雰囲気少なからず漂っているが、そのいずれにも井手の作品であると強く感じさせる特徴がある。井手は山に登って出会った風景、内にある記憶や想像、花言葉、あるいは小説の中の景色を織り交ぜて風景を描いているという。そこで、井手が読む小説について尋ねたところ、登場人物の心理を反映した梨木香歩の風景描写に惹かれる点があるという。冒頭の引用は、フロントガラスに落ちる雨によってあふれる涙を表した一文である。なるほど、ふたりの作品に共通して感じられるのは、自然、とりわけ植物への優しい眼差しである。19世紀の画家たちが描いた自然は目の前の現実であるが、井手が描くそれは梨木の『裏庭』のような異界（小説で裏庭はフォントを変えて現実と視覚的に区別される）である。風景を描いているとき、井手はその異界の庭番であり、描かれる風景は極めて個人的なものであるが、それは閉ざされてはいない。展覧会は言わば井手のガーデンオープンである。

一方で、長崎生まれの両親を持つ井手は、現実社会にむしろ鋭敏である。女子美術大学の卒業制作では、フランスの核実験に反対するややナイーブな絵とインスタレーションに忽然と取り組み、指導教官を困惑させたらしい。それ以降は研ぎ澄まされた感受性ゆえに、直截的な表現を避けているようだ。今回の展覧会「—整うまでの、—」では、雨をテーマにする作品が多い。そこに井手の日々の生活や心理が反映されているのは間違いないが、近年しばしば災害を引き起こしている豪雨さえも変換して、例えば《雨の中》では、細い細い、絹糸のような雨としてこの異界に降らせて浄化しているように見える。造形的にも、カルサイトやシェルマチエールなどのマチエール素材を混合せず、溶いたり擦れさせたりして油絵具そのものの純粋な表現に回帰する傾向が見られる。「雨が降るとすべてが整う。雨上がりは物事がきれいに見える。」

「降り続く雨が希望の光でありますようにと願う。」井手が今回の作品に寄せたコメントは、いずれもとても前向きだ。井手にとって、これらの希望に満ちた異界の風景は現実世界との均衡に不可欠であり、それを人々と共有することで、いずれ大きなエネルギーの源となることを望んでいる。

糸山昌夫（神奈川県立近代美術館 普及課長）



雨の中

oil on canvas 38.0×45.5cm 2022